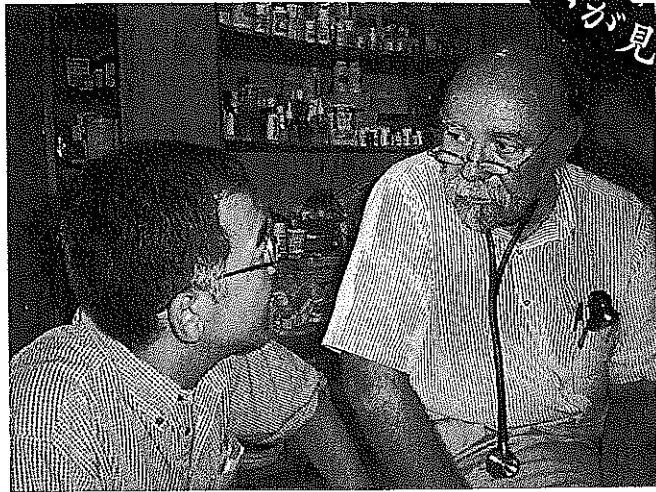


2003年7月にハイチへ赴任し、2004年3月にハイチを後にした。マンハッタン北東にあるコーネル大学バイル医学校感染症内科学講座助教授として、ハイチにあるカボジ肉腫・日和見感染研究所へ派遣されたのである。カボジ肉腫・日和見感染研究所は、主にハイチ人の医師たちによって運営されていたが、研究所所長であるビル・パップが、コーネル大学教授も兼ねる医師であったことから、コーネル大学の付属研究所のような性格も同時に有していた。そのための派遣であった。当時の私は、エイズのフィールド疫学研究、なかでも母子感染予防に興味を持っており、ハイチはそうした意味では格好の国であった。

長崎大学熱帯医学研究所  
国際保健学分野

山本太郎



ハイチの首都ポルトープランスの孤児院にて、オランダ人医師とともに診察する筆者

超えていた乳児死亡率は半減し、彼の研究所に入院中の子どもが、下痢

ち込んだのはハイチ人である」といった言説があった。この言説は、ア

## ●ハイチで出会った医師の言葉

——目標に向かって努力すれば、夢は実現する

私の赴任当時のハイチでも、エイズは大きな社会問題であり、その問題に取り組んでいたのが、医師で所長のビルであった。ビルは、ハイチに生まれたハイチ人。高校卒業と同時にアメリカへ渡り、コーネル大学で医学を学んだ。そのビルがハイチへの帰国を決意したのは、1970年代後半のこと。30代半ばの少壮の助教授、将来を嘱望された医師であったという。

「その国で最も重要な病気は何かね。その病気から始めなさい」という医師の言葉とともに帰国したビルは、有志のハイチ人医師を募り、活動を開始した。彼の活動は特筆ものであった。当時、1000人当たり140人を

症で死亡することはなくなった。治療した小児の数は1万人を超え、トレーニングを行った医療関係者の数は1万3000人を数えたという。

ビルが奇妙な現象に気づいたのはそんな時のことであった。小児下痢症対策に従事していたビルたちハイチ人医師は、小児下痢症による入院が減少するにつれ、大人の下痢症による患者が増え始めたことに気づいた。下痢に加え、痩せと消耗を特徴としていた。今から振り返れば、これがハイチにおけるエイズ流行の始まりであった。

1980年代初頭、アメリカではエイズが大きな社会問題となっていた。そのなかに「アメリカにエイズを持

メリカに暮らすハイチ人たちを苦しめたという。ただでさえ、ハイチ人たちは偏見にさらされていたのに。

そうした状況の中で行われたビルたちの研究は画期的であった。「アメリカにエイズを持ち込んだのはハイチ人である」という言説を打ち崩し、ハイチにエイズを持ち込んだのはアメリカ人である可能性が高いことを証明した。後に、この研究はニューイングランド医学会誌に掲載された。

ビルの目標は、ハイチのエイズ患者数を半減することだという。彼は言う。「目標を持つこと。目標に向かって努力すること。それを忘れなければ、夢は実現する」と。

山本太郎  
(やまもと・たろう)

1964年生まれ。90年長崎大学医学部卒。長崎大学大学院、東京大学大学院を修了。長崎大学熱帯医学研究所、京都大学医学研究科、ハーバード大学公衆衛生大学院(特別研究員)、コーネル大学、外務省国際協力局等を経て、07年より長崎大学熱帯医学研究所 国際保健学分野 教授。著書に「ハイチいのちの闘い」など。